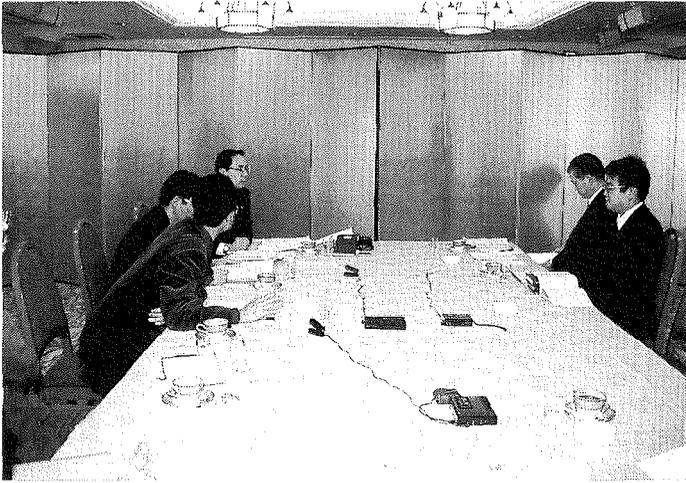


「海外神社をめぐって」



嵯峨井 建（さがい たつる）  
昭和二十三年二月二十四日生まれ。  
國學院大學神道學專攻科修了。現在、  
賀茂御祖神社権祢宜。專攻、宗教文  
化史。主な著書『日吉大社と山玉現  
権』（人文書院）『滿洲の神社興亡史』  
（芙蓉書房出版）。

前田孝和（まえだ たかかず）  
昭和二十五年六月二十九日生まれ。  
皇學館大學大学院文學研究科國史學  
專攻博士後期課程退學。現在、北海  
道神社庁參事。主な著書『發生期の  
現代神道』（神道青年全國協議会発行）  
共著、『遷宮をめぐる歴史』（神道文  
化会刊）共著。

佐藤弘毅（さとう ひろたけ）  
昭和二十一年二月六日生まれ。北海  
道大學大学院修士課程修了。現在神  
社本庁參事。專攻、実験心理学。

菅 浩二（すが こうじ）  
昭和四十四年七月十五日生まれ。  
國學院大學大学院文學研究科博士課  
程後期単位取得。現在、國學院大學  
日本文化研究所共同研究員。專攻、  
近代宗教史、宗教社会史。

（司 会） 佐野和史

佐野 司会ということですが知識が不十分なので、本当の取り進め役ということで話をさせていただきたいと思っています。今日は「海外神社を巡って」ということで、座談会をいたします。このテーマについて御著書があったり、論文発表なさってるといふ三人の方と、それから神社本庁が持っている海外神社の資料を扱っている資料室長の佐藤さんにも入っていただいて、話を進めてみたいと思います。まずお三方から、この海外神社のことをテーマとして研究を始めてみようというような動機などについて、それぞれのお立場でお話をいただければと思いますが、嵯峨井さんからお願ひしましょうか。



嵯峨井 私は個人的に神仏習合がライフワークのつもりで、長年追ってきました。古書漁りが趣味で、十二、三年前だったと思いますが、ガリ版刷りの薄べらな「関東州満州国神社一覧」という資料を、たまに東京都のある古書市で入手いたしました。それが海外神社にとりくむきっかけとなりました。心配した友人から「ミイラ取りになる」「やれキナクサイ」とか、いろいろと非難もされました。やってみて、ともかく大陸のいわゆる満州にあれだけのた

くさんの神社があったという事実、そういったことへの驚き。それから個人の身辺にも満州帰りの方が何人かお寄りまして、そういったこともあり、入手した名簿をベースに話を広げ、深め、いろんな方から資料提供がありました。神主ということがたぶん幸いしたと思うのですけれども、普通の方はそういう海外神社のことを口ごもって言わないわけです、もちろん活字化もされていない。そういう中でたまたま私が神主であり、そういう信頼関係があったことも幸いして、十余年あまり満州の神社に関してやってきました。

ただ、満州というのはいわゆる海外神社の中ではまあやりやすい地域という感じがしております。ちょっと卑怯かもしれないのですが、これなら大丈夫だろうとターゲットを満州国に設定して、取り組んでまいりました。一応そういう経過です。

佐野 その成果といえますか、それについては後にということですが、お一人ずつの紹介というようなことも兼ねて、前田さん、取り組みの動機ということについてお願ひします。

前田 前田でございます。私は昭和四十四年小倉の大学に入りました。いわゆる、七〇年代だったわけで、いろいろな刺激を受けました。そして大学四年の夏に父がくれた一片の葉書に「ハワイの神社で若い人を募集している」ということが書いてありました。ハワイのヒロ大神宮が神職希望の学生

さんを募集していて、日本の若い人を呼んで少し勉強してもらいたいというようなことでしたので、急遽國學院大學の神職養成の講習会を受けまして、正階をとったのです。三名位を呼びたいということだったのが、結局二人になりました、選に漏れたのが私でございます。そして専攻科に入りまして、二年ほど大学院に上がって、宮崎県神社庁に入りました。

その後神社新報に入りまして、たまたま葦津彦先生から海外神社の話をお聴く機会がありまして、戦後の神社本庁にとっての課題なんだという思いがずっとあったわけです。そしてその中でハワイの神社について調べる機会があったから海外神社に関する関心が深まったということですが、きっかけはヒロ大神宮との縁でございました。

佐野 補足的ですが、北海道方面に行かれて、何かいろいろ北方領土のほうの関係もあったと思うのですが如何でしょうか。

前田 平成五年に、北海道の神社庁に奉職することになりました。神社本庁包括の神社は六〇四社あり、五十周年の記念事業でいろんな神社のことを調べております、包括外を含めまして明治以降、実際は三千百社を超える神社が北海道に鎮座していました。現在は二、六五九社が確認されています。それと同時に北方領土、いまだ帰らない北方領土にも神社があった。千島列島が四社・北方領土が五二社です。それと北



ないのですが、まだそこまで守備範囲が広がっておりません。

佐野 ありがとうございます。

菅 先程前田さんのほうから、昭和四十四年に大学に入られたというお話がありました。私は昭和四十四年の生まれでございます。(笑)ではその昭和四十四年、いわゆる大学闘争の後に育った人間たちの中で、私自身神社関係の出身ではありませんが、いろんなことを考えながらここまで参りました。一つには神道に関心をもってから、神道の世界観というものがある基本的問題意識にあったものから、国学の持っている神話解釈であるとか、いろんなことを國學院の大学院に入ってから勉強しまして、博士課程に入ったときまではそれをやるつもりだったのです。途中、平田派国学と海外神社との関係に興味がおこりました。色々調べているうちに自分の中にあつた仮説がにわかに実感を帯びてきたので、これを

ぜひやってみたくなり、指導教授の阪本是丸先生に無理をいって、研究テーマを変え、海外神社を博士課程の研究テーマにさせていただきました。

私のテーマは朝鮮と台湾の比較についてですが、特に朝鮮を選んだのは、他の地域に見られない特徴として、日本と朝鮮の間には「同祖論」というのが、極めて大規模に流布しているというか、一般的なものにまでなっていたことによります。この日鮮同祖論が神社の問題に関しても、微妙な影を落としていているということに興味があったのです。そこで、一方で同じ総督府という行政組織をもちながら、よく比較される台湾との比較をやってみよう、というふうに思いました。

佐野 お三方にそれぞれの動機ということから、導入部分



としてお話をいただきました。少し話を具体化していこうと思うのですけれど、この研究に入っていくって、資料の所在とか、今日の一般的な戦前の海外神社というものに対する見方とか、そういうことの中で実際の資料に当たって、何かお気づきの点があったらそれぞれ御指摘をいただけないでしょうか。特に今日の状況とか、位置づけというか、そうい

う中でのご苦労というか、お気づきのところはございませんか。

前田 最初から大きなテーマに入ったのではまずいですね(笑)。今回の座談会の前に、嵯峨井さんから御連絡をいただきましたが、やはり問題というのは海外神社の位置づけがどうなったのかということだと思えます。明治以降のことを考えれば神社は北方領土、樺太、朝鮮、中華民国、満洲・台湾、南洋も含め海外、いわゆるハワイ、ブラジルもあり、やはり日本人が移住した、相手の国に日本の行政権が及んでいたか否かにより、だいぶ違ってきます。海外神社の場合、一律に皇民化だとか、帝国主義の云々というような表現をされる部分がありますが、必ずしも一律に論じることが不可能です。やはり移住地の地域性、歴史、そして日本人と現地の人との絡みによってある程度整理されていくのではないかと思います。その点では、海外神社の評価を今後ある意味では訂正していかなければいけない。そういう問題提起をしていかなければいけない部分があるのではないかと感じています。

まず、北海道から言いますと、明治二年の札幌神社、今の北海道神宮、いわゆる指定護国神社を除けば、本当に移住した人たちが自らの信仰として開拓の安全なり、また家族の安全というものを祈りながら創建された神社です。例えば、開拓の鍬を入れるとすぐ木を切って、そこに文字を書いて棒杓

神社とかいつてますけども、そういうふうな形で北海道の神社の多くが創建されています。

もちろん北海道神宮の開拓三神のお社は六〇数社あり、御分霊としてお祀りされてますけども、基本的には移った方々が本当に素直な気持ちで創建された。ただ気になることで、新田光子さんは『大連神社史』序論のところでこういうことを書いています。

「北海道や沖繩の神社が、『外地の神社』あるいは『海外の神社』と呼ばれたのである。そうした北海道や沖繩の神社は、明治以降国家の方針に従って、台湾や朝鮮などに創設された神社の先例としての役割を果たした。」というような表現をしております。ただ、こういうふうな断定されることによって、ひとつの海外神社の評価が定まってしまう恐れがあります。もちろん彼女は先取りをする形での論はダメだと、皇民化政策としての海外神社を先取りして、そういう位置づけで論を張ってはいけないのだと、自らが戒めています。しかしこういうふうな断定がしてありますので、神社を祀りたいと思った方々の心情が違う形で評価されていくわけです。これは忍びがたいというのが、まず私自身が海外神社をみるときの大きなポイントであるという気がしております。もちろん樺太をみても、他のところをみても同じですし、ハワイやブラジルをみても全く同じだと思います。同じというのは

移民の人たちが必要に応じて、自分たちでお祀りしなかった。そうして、後にいろいろと制度が加わってくることはありますけれども、基本的には移民の人たちにとっての神社であったというふうに思います。

佐野 いま前田さんからの樺杵神社という形から始まったという御指摘がありますけど、満州のほうの状況で嵯峨井さん、そういう具体的な事例も含めて、いまの前田さんの発言に対応するようなことは、ございませんか。

嵯峨井 海外神社の調査ということに関して、ものすごく難しい点があるわけです。一つは、私自身が昭和二十三年生まれであり、純粹な戦後派ですから戦前のことは実感がなく結局聞くしかないわけです。ところが海外神社に取り組もうと思ったとき、いわゆる海外神社といった途端、宗教侵略の存在として自明なことでされているわけです。結局何かを語ろうとすれば、先入感に負けてしまう恐れがあるわけですが、やってみると必ずしもそうではない。特に満州国内の神社を調べ出すと、宗教侵略論だけで説明できる存在ではないということがわかってまいりました。

戦前からの先達ですけれど、近藤喜博先生にも、朝鮮半島は面白いのもっとやりなさいというふうな激励を受けたこともあります。とてもそこまでは荷が重すぎますので、満州だけに限定しました。信賴関係の中でいろいろな事をとりあ

えず聞き書きといった、一種のフォークロアの的な手法で証言をいただき、ついで写真等の提供を受けました。例えば、皆さんからも私の本を書いたとき、研究になり得るかどうかといった御質問を受けました。それは手厳しいのですが、私としては研究の名に値するかどうかわかりません。私は近代史の専門家でもありませんし、ともかく最初に手を着けたのは、どういうことが行われていたのかという実態調査です。時期的にもう十年はおそすぎます。しかし、おそくとも結局実態調査を通じて、そういった宗教侵略論の呪縛というか、それに対抗する手立てを打つしかないと思います。そういうことでは方法論という大袈裟ですけど、私の立脚点というのはそこらにあるつもりです。

佐野 そうした中で、何か具体的な事例といましようか、満州における神社の典型的な形といえますか、そうした聞き書きの中で特色的な様子を何か挙げられるようなところはありますか。

嵯峨井 やはり満州といえば昭和七、八年代、満州建国が昭和七年からですが、そういう満州建国から始まった満蒙開拓団、また一開拓団に一神社というような原則が後で打ち出されるわけですが、いわゆる開拓団神社が、満州の一番大きな特徴だと思います。著書の中でも書いたのですが、日本の閉塞した農村の状況の中で、次男坊、三男坊は生きていく

ことがむずかしい。そういう意味で新天地を求めて、たとえ規模の大きな例では、信州では村の半分がそっくり満州に分村開拓したりもしました。ともかくそういう集落を形成すると、そこには必ず神社が必要となるわけです。

ある意味で神社の祖型といえますか、一つの共同体つくる、やはり核として神社がいる。人間集まるとおのづと格差が生まれ、喧嘩になるわけですけど、神社をつくらうといったときにはパッと一致するという。あるいは人間の寄せ集め集落ですから、いろいろな内部抗争が生れる。開拓団の団長が、村を二分して帰国するか残るかといった瀬戸際に神社をつくるとそれが止まったという話をいくつも聞きました。そういう生身の姿、私は「民草の社」という、何か古めかしい言葉で表現しました。その土地の名前をつけて神社をつくるという、あたかも『風土記』にするされた日本の古代を髣髴とさせる素朴な神社の姿です。満州の開拓団神社に、私は「民草の社」と名づけましたが、そうした神社の存在根拠みたいなのを異国の満州で確認し、調査の中で確かめることができました。

満州では開拓団神社が典型的な例だと思います。建国神廟・建国忠霊廟など国家的な神社もあるのですが、裾野という言葉は不適切ですけども、民衆レベルの「民草の社」といったものが満州国における大多数の典型的な例だと感じました。

佐野 「民草の社」という言い方と、それから建国神廟の問題など、そうした神社のあり方、これは御祭神の問題にも結びついてくると思いますけれども、菅さんのほうからそうした平田派の延長にあるのかどうかというようなことと、具体的な今のような実例との関連について、何か指摘できるようなところがあつたらお願いします。

菅 まず、先程前田さんが御指摘なされた、いわゆる皇民



化政策といわれる問題ですが、私はこうした政策はあつたと思っています。その代わりそれは戦時体制下の昭和十年代の出来事です。何か「皇民化」とか「神社強制参拝」とかいふ言葉を並べていると、何と

なく神道の天皇信仰なり、皇祖神信仰なりというものが何か侵略性をもっているのではないかというように、字面だけを見ますと思えてきます。しかし、これは戦時体制の問題であつて、内地でも外地でも同じようにやっていたことです。まずこの「皇民化政策」の問題は、戦時体制とは何だったのかということ、総力戦である大東亜戦争のときの日本の体制というのはどんなものだったのかという方向へ還元すべきであつて、神社そのものの信仰

の問題とは少し次元が異なるというふうに思っております。そのうえで平田派の日本中心世界観との関連ということですが、このことの説明は、この場では単純に申し上げられないので、ちょっと難しいなとは思っています。

私が主に追いかけている朝鮮神宮の場合は、徹頭徹尾日韓併合のモニュメントであることに最初から徹していた施設であつたと思います。だからこそいわゆる「民草の社」というような信仰とは、あまり縁がなかったのかもしれない。むしろ近代国家の論理というのが如実に表れた施設だったのでないかと思つているのです。それでは朝鮮神宮は神社神道と何の関係もないのか、信仰と何の縁もないのか、そこに何の信仰もなかったのか。新田光子さんがいうように、官が祀つた神社は踏み絵にすぎなかつたのかというと、私はそんなことはいらないと思います。

朝鮮神宮に対しても、いろんな信仰があつたという話は聞いておりますし、そういった民衆の信仰があるところに神社が生れるのだということだと思つています。ただ国家の統治の施設としてのみの性格を有する神社なんていうのがあり得るのかどうか。あるいは私は逆に、信仰のみで建つた神社というのがどこまであり得るのかというの、よくわからないのですが、少なくとも前者よりは後者のほうが考えやすいとは思っています。

佐野 このメンバーの座談会として記事になって載ったときに、海外神社について皆さん方の論文なり著書なりをお読みでない方もおられると思うので、ある程度具体的な例などもあればそういうような事例も挙げながらお話ししていただければと思います。

話が元に戻りますけれども、そういう建国神廟とか、朝鮮神宮とかの神社と、それから民草の社とか棒杵神社とかというようなものの両方のレベル、これを一概には分けられないと思います。そうした神社について、当時から小笠原省三さんや、葦津耕次郎さんなどが、祭神の問題を課題にしています。天照大神中心でいいのか、あるいは、いわゆる国魂神であるべきだというような論争がありますけれども、そういう問題についてそれぞれどんなふうな御感想をおもちか、また前田さんに戻って何か御指摘はありませんか。

前田 難しい問題だと思います。国魂に関しては北海道もそうですし、北海道神宮、いわゆる札幌神社もそうです。

佐野 あるいは、もう一つ、要するに移住していった日本人のための神社なのか。強制参拝という言葉がかかわってくるけれども、現地の人、北海道には先住民もあつたわけだし、朝鮮、満州、それぞれの文化をもった人たちの中で、何かそういう具体的な事例などお気づきのところがあったら、御指摘できるようなものはありますか。単なる宗教侵略論の

呪縛から一步出ていくための具体的な事例というようなものを御指摘いただきたいと思います。

嵯峨井 満州国の場合には、わりと確認しやすいと思うのですが、本当に小規模な神社なのです。私も写真などいろいろと提供を受けて、あるいは聞き書きをとつてる中で、一応満州国で神社の総数が五〇〇社位はありました。その中で圧倒的に多いのは開拓団神社です。建国神廟と建国忠霊廟は満州国の宗廟、五族協和の精神的な統一のために明らかに意図されたもので、ほかの恐らく九割以上の神社は、私が言うところの「民草の社」でしょう。規模は小さく、私の調べた範囲では、二十四人で一社つくっている例もあるわけです。

どんな神社かという点、人間が立つと自分の目線よりも低いくらいの小さな祠です、ところがそれがちゃんとれっきとした神社として登録されてるわけです。あるいは、信州の開拓団による諏訪神社でしたが、何と当初は御柱だけの本当に小規模なお宮さんでした。そういう神社がおよそ現地民を統治するなり、精神的に帰一させるなり、皇民化運動に関わるなんていうのはちょっとお門違いであって、まことにささやかなお宮であるわけです。それは結局自分たちのお宮です。他人さまのことなんか考えないわけです。ましてや現地の人々を帰一させるようなことを全く意図していないというこ

とは明らかです。あくまで日本人による日本人のための異国における神社、それが満州における海外神社の実態です。

ですから私のいう「民草の社」というのは、宗教侵略論の当てはまらない、まったくお門違いだと言いつける具体的な例ではないかと思えます。ただ、戦争末期になると各開拓団の周辺に朝鮮族や満州族の集落があるわけですけど、軍事教練や様々なセレモニーなどで何か集まる機会があると、日本の国旗、それから満州国の国旗の下でいわゆる寛克彦がはじめた「弥栄」といったことをさせると、それは現地の人に強制と受け取られたかもしれません。ただ、一般的に言うところ、決して宗教侵略で片付けられるような単純なものではなく、自足的な、あくまで日本人による日本人のための神社にすぎなかった。そういったことが満州国の開拓団神社では、私は確認できると思えます。

佐野 ほかに何かそういったことに関して御指摘はございますか。

前田 よくわからないので、教えていただきたいのですが、神社を海外に創建する場合、ある程度意識をもってレベルでは、祭神はどうあるべきかという論争があります。それと同時に、神社を信仰する一般の側には当然そこに集まってくれば、その人たちの思いというものがあります。創建主体側と信仰者側の人間は温度差があるような気がします。

ですから祭神の場合も、やはり神道の理念として異国の地、いわゆる新しい土地で、今まで信仰する人もいなく、お宮もなかったところに、何らかの意図をもって創建されたにしても、お参りする人たちにとっては、その祭神がどうであるかということももちろん大事なことです。お宮であるがゆえにお参りするという両方あったのではないのでしょうか。

祭神論争がある程度の方向性で論じられたとしても、ただ、そこにお参りする人にとっては、必ずしもそれと表裏一体の形で評価されるべきではないような気がするんです。

佐野 台湾と朝鮮での何か相違みたいなのは、今のようないまの中で感じられるところありませんか。

菅 まず大きな海外神社の御祭神を巡る流れとして、なんとなく北海道、台湾、樺太と開拓三神が祀られてきて、朝鮮で変わって、そのあと皇民化へ一挙に流れていくというイメージがあります。私はこの見方自体をまず否定しています。否定というか、大きく見ればそう言えるのかも知れませんが、むしろ前田さんがおっしゃったことのように、地域別にそれぞれの海外神社というのに特徴がある、御祭神にその特徴が現れているということに注目したい。すると、例えば、北海道と樺太というのは開拓三神を含めて、わりと一体なものとして認められていました。台湾の場合ですが、官幣大社台湾神社を初め開拓三神が多いのですけれども、いろいろと調べ

てみまずと台湾神社の場合は、台湾を領有するときの戦争で  
薨去された北白川宮能久親王をお祀りする宮としてつくると  
いうことがまずありました。創建するならば開拓三神をお祀  
りして、先に札幌神社を官幣大社に昇格させておいて、台湾  
神社も官幣大社としてお祀りしたわけです。しかし台湾の場  
合は、あくまで北白川宮能久親王という方が台湾の守護神で  
あったわけです。

では朝鮮の場合はどうであったかといえますと、朝鮮の場  
合は先程言いましたように日鮮同祖論というのがあって、私  
が前に書いた論文では、要するに韓国併合の前に葦津耕次郎  
翁とか、九州の神職の方々が韓国に神社をつくろうと動かれ  
るわけですが、天照大神を祀るという意見がほとんどでした。  
大國魂命とか開拓三神というのは、どういうわけだか朝鮮の  
場合は最初から最後まで出てきたことがないです。これは当  
時の日本人が朝鮮に対して、やはり北海道とか台湾とかと全  
然違う意識を抱いていた事実を表していると思います。そう  
いうことから考え初め、平田派が「朝鮮は素戔嗚尊がつくり  
給うた国であり、素戔嗚尊は檀君なり」といつていることと、  
國魂信仰というのが結び合わされて、朝鮮の國魂神としての  
檀君という信仰が、新たに生まれてくるというのが、私の今  
のところ朝鮮神宮の御祭神問題に関する見方なんです。

こうして見てきますと、それまでの大國魂命奉斎に対して、

朝鮮で急に皇民化イデオロギーが強まって、高木博志さんは  
「大東亜共榮圏に向けての侵略の神学」が始まったとおっ  
しゃっていますが、そういう単純化もまたできないと思いま  
す。もっと地域地域で見えていくということが、やはり御祭神  
論争という問題に関しても必要であると思います。

佐野 補足的な説明ですが、素戔嗚尊檀君論というのは、  
どのようなところから発生しているんですか。平田派の中で  
時代的に、そういうことをいい出した人はどなたですか。

菅 明治初年に熱田神宮の宮司になられた角田忠行翁です。  
角田翁は全国神職会など中央とは距離をおきながらも、『全  
國神職会会報』に寄せた文の中で「檀君は素戔嗚尊である」  
と述べています。ところがこれが面白いのは、今でこそ朝鮮  
半島では檀君に対する信仰は一般化してますけど、当時、貴  
族やら王族を除いてだれもあまり信仰してなかった頃に、そ  
ういう話に角田翁を初めとする日本の神職たちが注目してい  
たというのは、非常に興味深いことです。

佐野 何年頃ですか。

菅 明治三十九年か四十年くらいです。ですから併合前、  
日露戦争後の頃です。

佐野 それが満州のほうでは「建邦の神」なんかになって  
いきますね。その辺の経過については、少し補足的に説明し  
ていただけるようなお考えはありますか。

嵯峨井 満州国では祭神でいったら、圧倒的に天照大神です。建国神廟から開拓団神社に至るまで、規模の大小を問わず全てと言ってよいほど天照大神です。国魂論者として、例えば、先年亡くなられた庄本光政翁は、満州の吉林神社の宮司だった方で、その近くに五常神社という開拓団の神社がありました。たまたま庄本さんが五常神社の建設委員になっていたそうで、一説には宮司とされていますが、御本人から宮司はしてなくて、ただ助言をしたということでした。この神社が唯一国魂の神を実現した神社です。さっき見せていた資料には、営口神社もあるように書かれてありましたが、実現したのかどうか疑問です。約五〇〇社の満州国のさまざまな形態の神社があるわけですけど、いわゆる国魂の実際実現したのは五常神社一社のみということです。

菅 中華民国占領地であるとか、占領地でなくても、大陸各地に国魂大神というお名前が、神様が祀られていくということは昭和十年代に行われていますが、満州では天照大神が多いようです。

嵯峨井 天照大神が中心で、あと、例えば、信州の出身でしたら諏訪大神を相殿にまつります。私も最近まで気がつかなくなったんですけど、何でそうなのかという理由の一つは、昭和十五年よりあとのものだと思うんですけど、「開拓地移住要項」にはっきりと「天照大神を祀れ」と書いているのです。

それから事務手続上設立するときに、神社に關しては在満日本大使館の所轄ですから、個人的信仰に基づく祭神は少なくともそこで却下されてしまうわけです。例えば、自分がお稲荷さんを信仰しているからみんなでお祀りしようじゃないかといつても、それは却下されたのではないかと思えます。こうした要項のような、恐らくそうしたマニュアルがあつて、そこで若干の指導や助言があつて、天照大神になつたのではないかと思えます。もう一つは、満州の事例でいうと、いろんな集落のつくり方がありました。村ごとごっそり移つた例もありますし、一地方であっても寄せ集めで、例えば、私の郷里は石川ですが、能登ですから氣多大神、でも加賀は白山比咩大神というわけです。そうしたらもう分裂してしまうわけです。神社名は、例えば、加賀と能登の一宮を合せた加能神社というのがありますが、祭神をみるとやっぱり中心は天照大神で、それに相殿で氣多大神、白山比咩大神を併せまつります。そういったことで建国神廟から民草の社まで、一貫して天照大神なのです。

もう一つの理由は、やはり日本人として最大公約数といういい方は語弊がありますけれども、あえて一神をといえはやはり天照大神ということになる。それぞれ出身地の神様にこだわれば喧嘩になってしまうから、そういう共同体の精神的な紐帯の要とする神社には、やはり天照大神しかなく

たのです。開拓団の人々は、まず明治神宮に、そのあと神宮を参拝、そこでお札を受けてそれを御神体とした事例が多いようです。

海外神社でいったい何を祀ったかという具体例ですけど、満鉄沿線の主要神社では神宮の特別大麻でした。神宮に聞くと分霊ではないけれども神宮の拝み代といえますか、受け手はもう御神体として扱うわけです。最後に伊勢の参拝をして満州に入っていますから、日本人共通の神様はやはりお伊勢さんということで、それが結果的には天照大神となるわけです。一神だけだとか様々な批判を今日受けるわけですけど、それも当たらないと思います。

佐野 一方で小笠原さんは『海外神社史』の中で、むしろ国魂神のほうをもっと優先すべきだという運動をおこしています。嵯峨井さんのレジュメの中でも、「海外神社をめぐる先覚者の位置づけ」ということが出てきますが、この辺の方々の御意見をお読みいただいて、何かお感じになるところはありますか。極端な例でいうと、あの『海外神社史』の中には「いざれアメリカ本土を占領したときには、リンカーン命とワシントン命を祀る」なんていうことまで、中に載ってましたけど、その辺の論争について整理ができてますか。

嵯峨井 海外神社をめぐる先覚者といえますか、やっぱり小笠原省三氏が第一人者だと思います。戦前は海外神社活動

家と一時期は申し上げてもいいくらい、アジア方面を中心に東奔西走されたわけです。戦後もご承知のように大冊『海外神社史（上巻）』を編纂されましたが、ご長女の小笠原恭子さんにたづねたら下巻は未完に終り、原稿すらないそうです。この『海外神社史』も海外神社研究の基本的文献であり、古典として、これをまとめた小笠原氏は避けて通れない。

それから、古く遡ると朝鮮神宮の問題にぶつかるところですけど、大連神社の水野久直翁が有名なんですけれど、その前におられるのが実は松山理三という方で、案外この方が評価されていないように思います。最近松山さんの著作を一部読んだのですが、たいした人だなと感じました。大社教を開かれた千家尊福に私淑した人物で、満鉄沿線にあるたくさんの方々の神社の創建には必ず松山理三が指導、助言をしたようなことが『神社協会雑誌』に、断片ですけどよく出てきます。案外松山理三の業績は正当に評価されていないのではないかと感じます。

それから建築関係では、もちろん朝鮮神宮を指揮、監督、設計された伊東忠太、あるいは内務省神社局造営課長ですが、角南隆といった方の技術者としての業績もごいますし、改めて海外神社を論ずるのでしたら、先覚者は何をされたかということが重要になるかと思えます。庄本光政翁につづき、近藤喜博先生も昨年亡くなりましたが、近藤先生を含めて、

着実にそういった業績を検証して、そこから私もはやるしかないという感じがしております。

今述べた葦津・松山・庄本・小笠原など皆国魂論者ですが、国魂論について結論からいえば、海外神社運動の中ですべて敗退したと考えています。国魂神は式内社や古代の墨書土器にも記され、国土を守る古代からの大事な神ですが、中・近世にはなぜか隠れてしまいます。近代に入って札幌神社創建で再び顕われますが、長きにわたる隠れた時代とその理由、そもそも、国魂神とはいかなる神なのか、霊格・神格自体も十分に理解されていないのではないかと考えています。近代の神社で処遇されるしかなかったと考えています。

**佐野** 前田さんは葦津珍彦先生からも、いろいろとこの辺のことでお教えを受けたことがあるのではないかと思っております。何かコメントすることはありますか。

**前田** 先生の教えで印象に残っているのは、やはり戦後の引揚げ神職の調査、これを神社本庁がやらなければならないという問題提起をされたことと、朝鮮神宮の祭神の問題でございます。当然前者のほうの調査に関しては、資料室の佐藤室長を中心にして、本庁が持っている資料が多少整理されてますので、五十年経てやっと葦津先生の提言が生かされてきたと感じています。

また、もう一つは祭神のほうです。これは正直いって難し

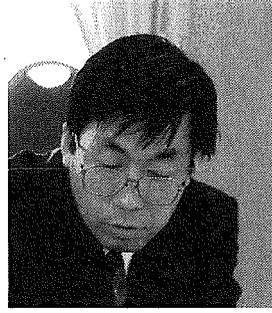
くてわかりませんが、やはり日本人として、神道者として神社を創建する場合、どういうふうに考えるべきかという視点です。それは国魂の問題でありますが、ハワイでも基本的に移住して入った人たちが、いろんなお宮をつくっていきましても、やはり天照大神を祀るのです。あとは先程出ました大社教やお稲荷さん、出身地の氏神さんを祀るとか、そしてサトウキビ畑での労働契約が終わった漁業経験者がハワイで漁業を生業としたため、必然的に金毘羅さんを祀るとか、そういうものがありました。

ただ、昭和十五年ぐらいになりますと日米関係が非常に厳しくなってきます。その中でハワイ大神宮ではジョージ・ワシントンとカメハメハ大王を祭神として祀り、今でも祀っております。その昭和十五年の頃、ハワイの神社も日米関係の厳しさを配慮していたという部分もあったのかもしれませんが、アメリカの国祖たるジョージ・ワシントンを祀ろうと、そして歴代の大統領の写真を拝殿に掲げたりと、星条旗下の神道を目指しています。祭神については天照大神を新展地で祀るといことはハワイでも継承され、氏神・職業神といった神々が祀られています。ワシントン大統領とカメハメハ大王は国魂ではありますが、「国魂神」論上での祭祀ではないと考えられます。

**佐野** ちょっと話が変わりますが、本庁の資料のことが出

てきましたので、このデータを整理する仕事をしておられる佐藤さん何かコメントしてくれますか。まず資料紹介を願います。

佐藤 資料室の仕事というのは、本庁の足跡をどのように



表現するかというのがまず根本にあります。それで設立当時からの資料を調べておりましたら、昭和二十一年十一月頃の「引揚げ神社援護会設立趣意書」というのがみつかりました。これは設立されなかったのですが、この中で海外で苦労され引揚げてこられた神職の経済的援助といったものも当然考えられておりました。その後、私が全国の神職に呼びかけ、「海外神社調査報告」というのを引揚げの神職の方からいただき、纏めました。この二つをつき合わせて見ますと、資料としてだけではなくて、個人の神職の生き方がそこにはつきり出てきているのです。海外の神社の様子が非常にはっきり出てまいりましたので、まずそれを整理し始めました。そこでは、これは『本庁十年史』に大体大まかなことは書いてありますが、やはり引揚げ当時神社を焼かれたとか、本人の命が危なかったとか、殉職された方とか、非常に切迫し

た状況が出ているのですね。これは当然現在の神職に対しても知っていたかなければならない内容のものでありますが、それらには私信的なものも多く含まれておりますので、残念ながら外部へ出せません。

そして私が根本的にしなければいけないと思いましたが、戦前各地区にどれだけ神社があったのかということ、数字化することであり、それによって神職の方々にこれだけの神社があったんだと、まずそれを知らしめるのが私の仕事ではないかと思ひまして、本庁にある神社の海外の一覧を再度整理をして作ってみました。他の動機としては、亡くなられた引揚げ神職の方に対する慰霊の気持ちも随分強くありましたし、海外神社はいついどうなったのかということも興味といいますか、私自身も初めて知ることでしたので、整理をしてみたかったわけです。

ここにおります菅君とか、嵯峨井さんとか前田さんのような方の力を借りて、大体の一覧を作ってみました。ただしハワイとかブラジルのほうはわかりませんが、とりあえず樺太、台湾、南洋、朝鮮、関東州、満州国、中華民国などでいま分かっているだけで六〇七社、他に神祠一、〇〇〇社、社一一六社があります。これは作成年度は別々ですが、すべて活字になったものを整理いたしましたので、嵯峨井さんのような一村一社というようなものではございませんが、少なくとも

現在表に出せる数値としてはこのようなどころございます。

一つは、各神社の祭神がどうであったのか、そしてもう一つは、いつ創立されたのか。これは一番大事なことは、社会的事象と創立年代が一致することだけではなくて、一致したからその社会事象と関係あるのだという単純な意味づけは避けたいために、一応創建年代も出してみました。ただ、神社の創立は戦争の激しさとともに、数の増減がみられますが、その裏ではいったいどうなっているのかが、今後の私の研究になるかと思えます。

本庁の一つの事業としては、先程申しましたように昭和二十一年に海外神社調査報告の件をやっております。昭和二十六年には文部省が宗教団体の在外資産調査をしております。これも数は少なくともございますが、大体その神社が持っている資産の取得状況、または戦後それを没収されたのか、引き継がれたのかといったものも書かれております。これを『神社本庁教学研究所紀要』に発表致しました。これによって一般の神職の方に何らかの形でアピールできたとは思っております。

また、昭和四十八年には同じような調査をしておりますが、このときの資料はほとんど数が少ないので、あまり使えるような状況ではございません。とりあえずそこら辺の資料をまとめて、一応整理をしてみました。

佐野 つけ加えてという失礼な言い方ですけど、小野迪夫さんが調査部長の時代に、何とか活字化しようという働きをして、私も若干お手伝いをしていたんですが、やはりいろいろな微妙な問題等もあったというようなことで、躊躇しているうちにどんどん日数はかりたってしまっ、ようやく今になって佐藤室長が苦労しているというのが状況であることも、つけ加えておきたいと思えます。

話をいろいろ承ってきて、神社の話ばかりですけど、台湾のほうでも本願寺教団が台湾にいくというようなこと、台湾神宮の問題なんかもどっか裏腹なことがあるのですが、そういうような仏教系の動きについて、神社の問題と対応して何かお気づきの点はございませんか。

嵯峨井 私 のほうからさせていただきます。いわゆる海外神社の研究は、神道学、神道史をやる方よりも、むしろ外の方が多いというのが実は不満でして、あくまで当事者が当然言うべきである、また当事者でなくてもそれを継承する人間が言うべきであると思うのです。そういう意味で各仏教なり教派神道に自分の教団について、どういった業績があるかということ、最近関心もちまして、ざっとですが調べてみました。そうしましたらやっぱり一番読ませるものは、浄土真宗の本願寺教団で、目覚ましい業績が出ております。例えば、大谷大学の木場明志氏を中心となって、現地の中国の方

と共同研究の形で発表されたりしたものが数編あり、平成四年に一冊の書籍にまとめられました。もちろん宗教侵略との位置づけが底流に当然あるわけですが、それを超えて読ませるのは実態調査をやっておられることです。仏教では明治以降、「布教」というと国内で、「開教」というと海外寺院の宣布を指すようです。そういう言葉の使い分けはともかくとして、その海外開教史を読みました。すると驚いたのは満州国

一国に限ってですが、神社と同じところに、本願寺の布教所が必ず設けてあるのです。一体神社が早いのかお寺が早いのか、いろいろと考えさせられましたけど、大体同じところに本願寺教団の施設が布教所という形で存在する。例えば、満州国で一番古いのは日露戦争直後の明治三十八年鎮座の安東神社ですが、すでに本願寺教団（大谷派）のお寺で、安東山沙河鎮寺というのがその一年前の明治三十七年に、従軍布教師みたいな形で入ってるわけです。一番目覚ましいのは本願寺教団ということがわかりました。

大谷大学の木場氏を代表とする研究が、私は敵とはいいませんが、あっぱれと啓発され、ある意味で得るところがありと感じました。

また、教派神道というと天理教の海外布教ということで大谷渡氏が書いておられますし、あるいは教団内の山根理一氏、満州天理教団の申し子といわれいまでは長老ですが、その方

がすぐれた記録をたくさんまとめておられます。私も今度『満州の神社興亡史』の本の中で一節、天理村神社の資料提供を受けて書かせていただきました。天理教団でもやはり海外布教というのは、明らかにされております。

それから日蓮宗ではご承知のように、中濃教篤という方がおられます、これは過激な論で私はとても承認はできないのですけれども、ともかく気炎を吐いた一連の著作がございます。

キリスト教教団では、海外布教ということで、朝鮮半島をとりあげたものが盛んですが、勢い神社のことを書かれますと、やはり「強制参拝」ということが、強く強調されて論じられております。金光教の教学研究所からも渡辺順一氏の着実な研究が現れております。

こういうふうには、ここ数年のうちに諸教団の戦前の海外布教、海外開教といった調査・研究が続々として現れつつある、そう派手ではありませんけど、着実な研究として現れつつあるという感じがいたしております。

佐野 神道以外のことで、菅さんのほう、何かお気づきのことありませんか。

菅 いまお話がありましたけれども、私は日露戦争直後というのが、神社および日本宗教の海外布教に関する一つの曲がり角だと思っています。日露戦争直後にやはり満州、そし

て朝鮮、特に日露戦争で遼東半島を勝ち取ったということが、その前の三国干渉による臥薪嘗胆をひっくり返したということで、父祖の血であがなった土地である満州に対するものすごい執念とでも言うべき熱意につながったように思われます。

本願寺を初めいわゆる教派の各派も、朝鮮、満州など各地に、ものすごい勢いで進出しておりました。『全国神職会々報』などを見ましても、それらに対して神道が出遅れてるぞ、神社が出遅れておるぞというような声は、かなり強く出ています。しかし現実になんかそれを結んでいくという形にはならないわけです。やはりそこには、神社と他の宗教とを同列に論じるということができなかった、ということがあるからなんです。さっき信仰というお話がちょっと出ましたけども、海外は内地とは異なり、神社も宗教として他のお寺さんなんかと並んでいくというような、競合関係があったのではないかなと思っております。

佐野 前田さん、北海道でも仏教と神社との関係みたいなことで、お気づきなことありますか。

前田 まず一点は、やはり神社と相前後してお寺が建てられています。神社の場合は移住の人たちがその安全と成功を祈るということで、自発的に祀りたいということですが、どうもお寺の場合は、どこかで戦略があって入っていくというような感じがします。恐らくどこもそうだと思いますけど、

内的要求でない限り、個人であれ、組織であれ、外部から持ち込む場合自覚されたものがあります。大連神社も、松山さんがやはり命を受けてということがありました。これには大社教のいわゆる戦略があつてということよりも、その権威をいただきながら行って向こうでやるということです。個人で来ましたというよりも、何かの命を受けましたというほうが運動しやすい。ハワイの出雲大社も同様です。神社側の組織的な戦略はありません。個人レベルですね。

北海道での神社とお寺との関係ですが、お互いに宗教であつて競合関係にあるという面は、ないと思います。現在のハワイは、競合関係にあります。一方では二重信仰の要素もまだ残っています。

佐野 司会が不手際です。でなかなかうまい具合にまとめられないかもしれませんが、そういう方向に入っていくかと思えます。その取っ掛かりとして、嵯峨井さんの本を読まれた読者の方の反応が色々あつたというふうに聞いておりますが、そうしたものにどんなものがあつたのか。またそういうのを受けられて、戦後五十年過ぎたこの時期に、今後われわれが海外神社というものをどうとらえていったらいいのか、そういう方向で嵯峨井さん何かお話しただけませんか。嵯峨井 私は昨年ですが『満州の神社興亡史』という本を書きました。テーマの性格上、あくまで嵯峨井個人のチーム

プレーで、他に迷惑が及んでは不本意なものですから、あくまでも個人ということでもやりました。いろんな意味で海外神社を神主自身が語るというのは、本当に怖い感じがいたしました。前田さんはどうかかわからないのですけど、私の場合やはりアジアと向き合うことになりすし、少し臆病かもしれないかもしれませんけれども、私なんか団塊の世代で、自虐史観の教育を受けた世代ですから、そういったことを本当に過敏なくらい意識しました。

そして読書カードが出版社を通じて四〇枚くらいきました。あんな地味な本で四〇枚くるのはいいという人もいましたし、たった四〇枚かという人もいたのですけど、その反応は総じていえば私が怯えたようなことはなかったのです、かえって肩透かしみたいな感がありました。大半は、お前は昭和二十三年生まれらしいけど、よくやったご苦労さんというような感じで、そういうことは大事なことでありという激励が大半でした。

少し緊張したのは、耳慣れない戦跡考古学の方からの葉書でした。南方なり大陸でかつての日本軍の戦車があるとか、大砲や飛行機の残骸といったものを調査する戦跡考古学というのですが、去年の朝日新聞にも載っていて、ああこれだなと思ったのですが、そのチームの一人から反応があり、電話で話しました。大東亜共栄圏の侵略の跡を調査するというのが彼ら

の仕事ですから、本庁で佐藤さんがデータベースで「海外神社の一覧」を纏められた際に懸念されたのと同じように、言葉は悪いのですけど、何か利敵行為になるような気もしたんですけれども、早速あなたの本を持ってこの夏には中国へいってくると言われて、これはまずかったかなと思わないでもなかったのです。(笑)

しかし、そういったことはいずれわかることであって、指摘されて弁明するよりも、当事者の人たちをわれわれが継承しているのかどうかわかりませんけれども、少なくとも神社人として、自ら言われる前にいったほうが勝とは言わないまでも、言われておもむろに語るよりは、いさぎよく事実を認めの方がよい。そのほうが、もちろん一部には確かにいろんな問題もあるわけですけれども、思い切ってやってよかったというのが、私は本を出しての一つの感想です。

また、情報提供がこれをキッカケにありました。中には海外神社にいた方で、今は神主ではないのですけど、神社新報に広告を出してなんでもっとちゃんと調べないのだとお叱りがありました。私はちょっと驚いたのでですけど、それで前田さんの「神社本庁の海外神社調査史」というすっきりした論文があるものですから、これを下敷に、いや、決してそうではなく、戦後に葦津先生を筆頭に、神社本庁は大きく三回の調査を試みたのだと言いました。その都度不発に終わって

いるのは、結局当事者がものをいわないからだ。ちょっと感情的になったんですけど、私としてはちゃんと調べるといわれると、喧嘩を売られたような気がしまして、直接電話と手紙で、それならばなぜあなたは自らの口で語らなかつたのですかと、私も感情的に述べたりしました。要は戦前の海外神社の方はひっそりと自らのことを語らない、そういうことを感じました。

私は現地の中国にも行き、言葉を選び配慮しながら通訳を介していろいろ聞きとりもやったり、あちこちの神社を二、三社まわりました。ところが、こう言うんですね現地の方が、「嵯峨井さん、あなたは気をつかって調べておられるが、すでに時代は進んでいる。当事者は消えつつあり、それはもう中国でも同じだ」と、「もう戦後派が大半だから、戦争のころといったって記録しなければわからなく、生の体験者というのは、中国でも消えてしまうのはもう時間の問題なんだ」ということを言われました。そして私が年齢的に戦後派であるということも幸したのかもしれないですけど、決して現地でもあまり私が懸念するようなことはなくて、当時の中国人の思いを教えてくださいました。最後は涙ながらに、握手して別れた方もいるのですけれども、事実が事実として認めるといったことが大事ではないかということを実感しました。

先程ちゃんと調べると注文つけられた方は、実は安東神社

の神職の方ですけど、本当に控え目に私に語って下さいました。本書をきっかけに満州に第一歩を踏んだ安東神社の神主さんがものを言われたわけです。そしてやはり私たち戦後派は簡単に思いついた僭越なことをいってはいけないと思いつけられたのは、最後の御神体の状況でした。私は「不明である」と書いたんです。宮司さんが病死して不詳であると、それで終わったものですから、それがその方にはカチンときたらしいのです。それではどうだったんですかと聞くと、やはり社殿は最後に爆破されたわけですが、そのときの状況は暴民に襲われ、実は御神体は後ろの山の地中にひそかに埋納していたと言うことでした。それで御神体は、その後どうしたんですかと尋ねたら、結局御神体は出国時に没収されるおそれがあり、あるものに遷霊して現在もしかるべくお祀りしているというようなことを、洩れ承ったのです。そういう形で一例ですけれども、そういう実話を拝聴しました。

やはり当事者はどうも語りにくい、戦後五十年の歩みというの、決してそういう口を開かせるような状況ではなかつたわけです。私がたまたま戦後派であることや、過去のしがらみがないということをよく言われるのですけど、いい意味でそれはそうだと思うのです。また神主であるといった立場なども幸いして、いろんな調査が可能であつたわけです。読書カードの中で、そういうような反応がありました。またこ

うした海外神社の調査は大事であるというのが、大半の意見でした。

前田 広く海外神社といった場合、残ってるのがさつき言いましたようにハワイ、南米などで戦前からの関係の神社です。サイパンとペリリュー島などもありますけど、これはちょっと趣旨が違うような気がしますので、一応除かせていただきます。そこで考えますと、やはり日本人が移住し日本が敗れたことによって引揚げたときに、いま嵯峨井さんがおっしゃったような問題が生じたのです。樺太の場合は日本の領土だったのですが、他の外地などと、ちょっとニュアンスが違う部分があると思います。樺太の場合は日本の領土で、旧ソ連が侵攻して占領した。形式上はまだ帰属先が決まってないというところですよ。

ハワイは日本の行政権が及びませんでしたので、アメリカの法律に従って残っていた。ただ、戦争が始まったとき活動は停止させられましたし、場合によっては財産を没収され、競売もされた。そして戦後に裁判をしたり、あるいは返還申請という形をとって、凡そ昭和二十七年の、サンフランシスコ講和条約の在外の宗教資産は返還するという条約内容の影響もあって、財産返還を願っていた神社に関しては全て財産が返されたわけです。

樺太の場合は、ソ連軍が侵攻して神社が焼かれたり、破壊

されたりしました。住んでいたのはほとんどが日本人、もちろん朝鮮系やロシア系の人も住んでいましたけど、そこでは他の地域で問題になったようなことは、起こらなかったわけです。ただ、近年は今の画一的な歴史観で樺太を見ようという人がいて、やはり軍国主義だ、帝国主義だという視線で、朝鮮系の人々の絡みや、または炭鉱労働者の関係などの絡みで見られる部分があります。そのような史観で見ても生の歴史は見えてこないと思います。要は地域によって見方を変えていかなければいけないと思います。

私も北海道の神職で、樺太慰霊祭奉仕会というのをつかっており、過去三回慰霊祭と調査をしました、今後も調査等は続行する予定でありますけれども、たまたま旧ソ連が昭和二十年八月から四、五年間にわたった調査をしており、その資料の所在がわかりましたので、それを再度調査をし、翻訳作業をする予定です。『月刊若木』の「若木談話室」に載っていますが、例えば昭和二十一年十二月ですが、僅か活動していた四社に対して食料品、酒、砂糖を配給するユジノサハリンスク市の指令の記録や、日本の宗教団体の活動報告書などが残されています。

そういうのを調べることによって、樺太での神社というのがどうだったのか。ソ連軍は「神道指令」的な発想で神社をみていますので、その当否は別として、樺太の神社及び他宗

教の終戦処理が明らかになり、画一的な視点で樺太を促えることは適当ではないことがわかるはずです。そしてほかの地域を調べることによって、もっと海外神社のいろんな問題点というのが、恐らく明らかになっていくのではないかと思えます。

一点だけつけ加えさせていただきますと、ハワイの神社は現存しているわけです。そして終戦前後のときに、やはり先程いきましたようにジョージ・ワシントンを祀ろうというのがありますし、日米関係が厳しくなりますと、やはり日本の手先であり、いわゆる神社で天皇の教育をしてるとかいう話もまことしやかに語られ、そのことは日本語の新聞などに当たりしました。そして開戦直後多くの神職がアメリカ本土に抑留されましたけど戦後ハワイに帰ってくる。帰ってくる神社を復活させる運動も起こりました。そして没収された財産を返還獲得するための裁判なり、請願をしていきますが、その中でやはり日本との関係というのが非常に問題になってきます。日本の手先だったのではないかとか、そういうのが裁判の中で出てくるわけです。そして占領軍が作り出した『日本の宗教』という本の、文部省の関係英語版を入手して、その本の視点でハワイの神社をみようとしたりしてありました。ですからハワイの神社をみることによって、本当の海外神社がどのような形で創建され、存続していったのか、他の

地域の神社との共通点なり、また相違点が判り、他の地域の海外神社のこともっと明らかにする、視点もまた変えることができるのではないかと、そんな思いもしています。

佐野 菅さんから、今後の研究の方向性や立脚点として指摘すべきことがあったらお願いします。

菅 北朝鮮には行ったことはありませんが、韓国と台湾の現地に、本当は何度もいきたいのですが、一、二度ずつは行っております。先日二、三週間ほど台湾にまいりました。そこで数年前に『日本帝国主義下台湾の宗教政策』という本が出ております、蔡錦堂という方が書いた本ですが、この蔡さんが台湾の淡江大学の副教授をなさっているのですけど、この蔡さんとお会いしまして四時間ほどお話してまいりました。

その席で非常に印象に残る一言を蔡さんがおっしゃいました。それは「台湾は多神教の国です、よそからきた信仰を拒むような信仰の形態はありません。ですから神社が台湾に根づかなかったのは、神社の側が、国家神道の側が台湾の信仰を拒んだのです」とのことでした。普段よく神社は多神教で他宗教を拒まないというふうは何となく思っている私たちからしますと、びっくりする一言でした。そこで蔡さんがおっしゃっている国家神道というのはどういう次元で、日本の研究の次元のどのぐらいのものを踏まえていっているのか、いろいろ聞いてみましたらどうやら中島三千夫さんあたりが言っている

「国家神道」という意味での理解をなされているようでした。私たちが、神社の未来というのを考えていくうえで、やはり「国家神道」とか近代の神社というのは考えなければいけない。その中で、神社だけに限っても六〇〇、神祠などを合わせますと一、〇〇〇という、海外に建てられた神社、そしてそれらの神職の方々の御苦労、あるいはそこにかけた人々の思いというものを、全く無視することはできないはずです。それを日本人は当時何を考えてそれらの地域へ出ていって、どういう神社を祀ったのかということ、各地域ごとにもみていくということが、やはり今後の未来の東アジアとの国際関係を考えるうえでも、役に立つのではないかなというふうには思っております。

それで私自身の研究の今後の展開としましては、朝鮮のことをまずある程度見たうえで、台湾についてもやりたいと考えています。私がかれから追いかけていた人々というものが、山口透という方でして、台湾神社の初代宮司ですが三十年以上宮司をなさっております。実は神宮教の布教師として北白川宮親王にも付き添っていた方ですので、東京大神宮とも御縁があるかもしれないのですけれど、こういった方が三十年にわたって台湾神社では宮司をお勤めだった。そして昭和十二年にお辞めになったのですが、いわゆる先程私がいきました皇民化と呼ばれるものが、台湾で本格化する

のはちょうどその前後でした。私は海外神社を戦争とのみ結びつけて考えるのはあまり好きではありません。五十年、六十年の海外神社の歴史の中で、たった数年間の第二次大戦の間だけをどうこうするつもりはないのですが、その戦争の直前まで三十年以上も宮司だったという山口透が、ミスター台湾のような方なのかなあと思ひまして、この方を研究したいなと思っております。

前田「神宮大麻」との絡みが当然海外にもあります。戦前海外でも数多く頒布されましたし、ハワイでは少なくとも七千二百体ですけれども、現在も頒布されております。明治三十六年ですが「神宮大麻」を頒布したいという手紙を、移民が伊勢の神宮に書いているわけです。それを今度は神宮が奉斎会のほうへ回して、その後の結果は出てませんけれども、それでも明治の後半には正式に「神宮大麻」が頒布されておりますし、神宮奉斎会からハワイ島のヒロ大神宮宮司に辞令が出ています。

多くの移民はお伊勢さんを祀りたいと思っていたのです。明治三十一年十一月三日に鎮座したカワイ島のラワイ大神宮に国祖たる天照大神は祀りたいという記録が確認できます。十一月三日明治節です。そのときに遷座祭が行われているわけです。ハワイではヒロ大神宮、ハワイ大神宮、それとマウイ神社が頒布しています。南米でも頒布されています。

佐野 何かさらにつけ加えたいことがございましたら、もう一言ずつお願いします。

嵯峨井 先程佐藤さんが、各地域にある神社と神祠を合わせますと海外神社は一、六〇〇だということをおっしゃられたのですが、これは公官社という公の社で、これは昭和二十年ぎりぎりまでの状態ではないので、当然これより増えることが想像されるわけです。例えば、本庁資料では満州国は二二九なんですけど、私自身の最新データでいくと三四五になりますから、約一〇〇ぐらい増えてるわけです。先程の朝鮮半島の神祠の問題までいれますと、恐らくざっと一、〇〇〇を超えたのではないかと推定しております。こういった一、〇〇〇という数の神社、歴史的な評価は抜きにして、これだけたくさんの神社が近代史の歩みの中で、明治十五年の元山神社を海外神社のもし第一番とするならば、これ以後六十四年間の間に一、〇〇〇社もの神社を日本人が外地につくったという事実です。しかもそれはそれぞれに構成員や賛同者があり、内地から何らかの形で御神体を迎え、そして鎮座祭をし、そういった個々の営みといえますか、日本人同朋が紛れもない異国の地で神まつりがなされたという事実、これはトータルに考えると本当に神道史にとっても重大な無視できない事実であり、そのことの実態究明というものは、決して等閑視できないのではないかと。数からいうのではないのですけど、

重要なことだと思えます。

佐野 重要性について、ある意味でまとめになるようなことですが、他にございませんですか、よろしければこの辺でというふうに思います。六十数年の海外神社の歴史について、今まで資料収集や、特に発表等についていろいろな制約の中でこの課題について取り組んでこられた皆さん方に、今日はお話を伺いました。

六十数年というと、特に戦時中の問題については私も葦津珍彦先生から、例の星野輝興さんの追及の問題なんか絡んで、海外神社の天照大神一神教的な部分についての批判の運動なんかについても、話を聞いたことがあります。それぞれの時代のいろんな問題点というのが、今日の神社のあり方にもいろんな影響があると思います。神社というのは先程の本願寺教団と違って、中央本部が強い権力を持った組織ではないけれども、現に神社本庁は存在し、国内にあっても個々の神社の独立性が尊重され、しかも全体の統合が図られている。こうした性格が色々な面に出てきてそれが最も特徴のある形で海外だと端的に現れてきてしまっているのだなということをお話を今日の話の中で感じながら聞いてきました。

十分な纏めになりませんけれども、時間になりましたので、この辺で座談会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。